

群 教 セ	E03 - 03
	平17.227集

生命を大切にする心情を育てる指導の工夫

— 保護者の手紙「私の誕生」を活用した人権学習を通して —

特別研修員 前原 文哉 (伊勢崎市立あずま中学校)

《研究の概要》

本研究は、主に道徳の時間の学習を通して、人権感覚を高めることができる生徒の育成を目指したものである。具体的には、自分の考えを深められる話し合い活動を通して、いじめに関する学習、理解と行動のずれに気付く学習、生命尊重の学習（私の誕生）を行うことで、生命の大切さについて学び、生徒の内面にある人権感覚を育てていこうとした実践的研究である。

キーワード 【人権教育 生命尊重 いじめ 人権尊重教育 道徳】

I 主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会問題は多く、特にいじめや偏見・差別などをはじめとした子どもたちを取り巻く人権問題がある。人権問題は、加害意識が薄く、表面化する場面が少ない。「頭では分かっているが・・・」と言うように感覚的な問題である。したがって、人権問題は、生徒の生活レベルでも見え隠れしている。その人権問題について、しっかり生徒に教えていくことは非常に大切である。

本学級の生徒（中学一年生 男子20名、女子15名）は、元気で授業態度は落ち着いている。グループでの話し合い活動も比較的活発に行う。しかし、学級活動や道徳の時間では、進んで自分の意見を発表できない生徒も見られる。道徳の時間では、自分の考えがノートに書いていても進んで発表できない生徒が見られる。したがって、学級の中で意見を交流させて自分の考えを深めていく活動があまりできていない状況である。人権に対する考えを深めていくためには、話し合い活動の充実は避けて通れない課題である。休み時間の様子を見ると、相手が傷つくような発言を無意識のうちにしたり、ふざけあうという行動が度をすぎてしまうことがある。大きなトラブルはないが、相手のことを思いやったり、相手の立場になって行動するまでには至っていない生徒が多い。

人権問題は内面的な問題でもあり、子どもの本音を導き出したり、子どもの心に響く授業展開をしていく必要がある。そこで、子どもたちの内面にせまるためにも、話し合い活動を効果的に進めら

れるように学習していくことが必要であると考えた。自分の意見を率直に発表できたり、友達の意見を受け入れることができたりする雰囲気を基盤として、人権問題に対する自分の考えや他人の考えに触れ、自分の考えを深める学習を設定する。そして、自分たちを取り巻く人権問題にはどのようなことがあるのか、考えていくことで、間違った考え方や自分自身の問題点を理解していく。そして、理解と感覚のずれに気付くことが大切であると考えた。

人権問題の根本は、生命尊重であると考えた。最大の人権侵害は、生命を脅かすことである。人権問題に共通する「自分はかけがえのない存在であること。そして、自分と同じように他人も大切にすること。」ことを学習していくことは、重要であると考えた。

①いじめに関して、自分の行動を振り返る学習。
②生命の尊さに気付く学習。この二つの学習を通して、生命を大切にする心情を育てることは人権感覚を高めることに効果的であると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

主に道徳の時間において、人権に関する授業や生命尊重の授業を通して、自己の人権に対する考えを深められることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

1 学級活動の時間（授業①）において、いじめについて自分の行動を振り返る学習をすることによって、いじめをする可能性のある自分に気付くとともに、いじめの悲惨さやいじめは時として、生命を奪うことになるに気付くであろう。

2 道徳の時間（授業②）において、生命尊重を取り上げた学習をすることによって、自分は両親の愛情に包まれて生まれてきたことや生まれてきて良かったと実感することができるであろう。そのための手段として、全員が保護者からの手紙「私の誕生」を読む。友達の手紙を読んだ感想を聞くことで、自分も友達も同じように生まれてきた大切な存在であると、気付くことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「人権感覚を高める」とは

人権感覚を高めることは、一つの授業（手だて）だけで解決できることではないと考える。様々な手だてを経て少しずつ高めることができる。「人権感覚を高めること」を植物に例えるならば、いくつかの手だてによって、その植物を育てることであると考えた。そして、学習したことが、後々の生活場面（人生）に生かされなくてはならない、と考えた。本研究では、三つの学習を通して、人権に対する生徒の考えを深めた。

(2) 「理解と行動のずれ」とは

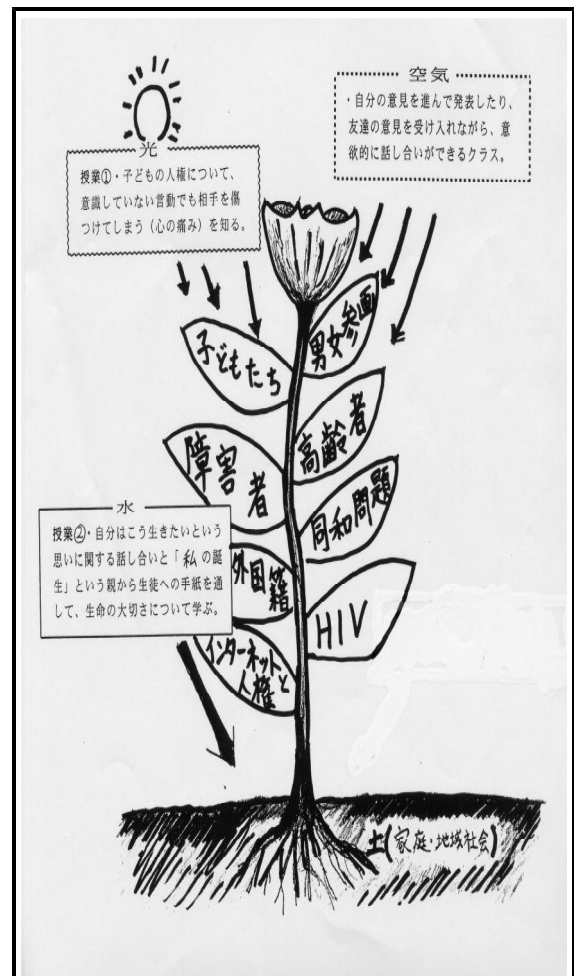
ふだん、生徒には自分が意識しない差別言動がある。友達の見解に対して笑ったり、困っている友達がいても何も声をかけなかったり、手伝わなかったり・・・と。また、加害意識が薄いという問題点もある。自分の生活を振り返りどんなことが問題点なのか理解し、それを改めようとするのが人権感覚を高めるスタートであると考えた。

(3) 「私の誕生」とは

子どもが生まれた時の感動は、計り知れないものがある。その時両親は、生命の神秘さ・生命の大切さ、そして子どもに対する様々な思いをもつであろう。しかし、その思いはなかなか生徒に伝わる機会がない。両親も子どもの成長とともに誕生の感動は薄れ、子どもも生命の大切さを感じる

機会はめったにない。そこで、子どもが誕生した時の話や子どもに寄せる思いを「私の誕生」という手紙を通して知ること、自分の生命はかけがえのないものであることや両親の思いを通して、「生まれてきて良かった。」と実感できると考えた。人権教育において、生命の大切さを学ぶことは不可欠であると考えた。

(4) 全体構想図(人権の花)



2 実践の概要及び結果と考察

(1) いじめの発生件数を知るとともに、いじめに関する自分自身の行動を振り返ることによって、いじめをしてしまう可能性のある自分に気付くとともに、いじめの被害者である、ある生徒の手紙(遺書)を通して、いじめの悲惨さを感じ取ることができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

学級活動の時間において、まず、いじめの発生件数のグラフを提示して、いじめがいかにか多いか、その内容はどのようなものなのかを確認した。そして、自分自身がいじめをしそうになったことは

ないか、個人・グループで振り返るとともに、いじめという行為は、相手を精神的に苦しめることであるということを理解した。個人で考えた後、グループで話し合うことで、生徒は自分の考えを深めることができた。最後に、いじめの被害者側の手紙（遺書）を朗読することで、いじめは、時として相手の生命を奪うことになりかねないことを知った。

イ 結果と考察

友達をいじめてしまいそうになったことには、どんなことがあるか、自分の行動を振り返る活動では、複数の内容を答える生徒や微妙なニュアンスの違いはあるが、「悪口を言ってしまった」と答えた生徒が、33名中21名と、最も多かった。次に多かった内容は、「無視をした」で33名中5名であった。その後グループでの話し合い活動を行った。その際、自分とは違う意見はメモをしながら聞くように指示したことで、自分と友達の意見が同じなのか、どんな点が違うのか考えながら発表を聞いていた。自分と同じ意見であっても「友達の意見に対してどう思うか」と考える場面では、自分も気付かずに相手が嫌がることを言ってしまったから気を付けようと思った、と話し合い活動の中で、自分自身を振り返ることができた生徒が多かった（33名中14名）。話し合い活動では、「友達をいじめてしまいそうになった時、どんなことを考えていたか。今、その時を振り返るとどう思うか」と、教師から問い掛けることで生徒の気持ちを揺さぶる工夫をした。最後に紹介したいじめの被害者の遺書は生徒にとっては、インパクトのあるものであり、いじめは生命を脅かすものであると感じた生徒が多かった。いじめの被害者の遺書を読むことで、それまで振り返ってきた自分の行動も場合によっては、生命を奪うことになると感じることができた。それは、授業の感想に表れていた。

抽出生徒Aの授業感想の記述(資料①)

自分の意見の他にも、友達の間で起きている事などがたくさんあって共感できるものも多かったです。いじめで自殺してしまった男の子の遺書は、いじめの激しさをとてもくわしく伝えられていました。私は今日の授業で学んだことや、自分が思っていることと、他人が思っている事の違いを、もう一度考えたいと思いました。

抽出生徒Aは、導入時、いじめの多さに気付いたが、悲惨さを感じるまでには至らなかった。抽出生徒Aの記述（資料①）から、話し合い活動を通して、自分の考えを振り返っている様子がうかがえる。グループでの話し合い活動によって、自分自身をさらに深く振り返ることができたと言える。また、いじめの悲惨さを感じている記述もあった。

抽出生徒Bの授業感想の記述(資料②)

いじめはいけないと改めて実感しました。ときにはその相手を死に追いやることもあります。友だちを何回もいじめてしまったことがあつたのすごく悪かったなと思いました。今日の授業で改めていじめのいけなさを知ることができました。

抽出生徒Bの記述（資料②）に、「いじめは相手を死に追いやる」とある。いじめの被害者の遺書を読むことで、いじめは相手の生命を奪うことになると感じ取ることができたと言える。

(2) 保護者からの手紙「私の誕生」を読むことによって、自分はいじめがえのない存在であると感じることができるとともに、友達も同じように大切な存在であると思うことができたか。（見通し2）

ア 実践の概要

道徳の時間において、前回の学習内容を振り返った後、どんな時に生命の大切さを感じたか考え

た。その後、自分が誕生するまでのエピソード、保護者は自分にどんな思いを寄せているのかが書かれている、保護者からの手紙「私の誕生」を各自が読んだ。保護者からの手紙は、全員が手にした。そうすることで、自分自身の事として実感しやすい。手紙は、糊付けされていて、授業で初めて生徒が開封することになる。本人の許しが得られた手紙については、全員の前で手紙を読んでもらった。そうすることで、友達も自分と同じように生まれてきたと気付くことができた。

さらに、「私の誕生」を読んだ感想も発表し合った。最後に、教師から「生まれてきただけで価値がある」という話を聞いた後、授業の感想を発表し合った。なお、本授業は、保護者の参観授業として実施した。

イ 結果と考察

どんな時に生命の大切さを感じたかという問いに対しては、「怪我をした時」「ニュースで事件を見たとき」という内容だけで、「無い」と答えた生徒が、33名中11名いた。このことから、ふだん生命が大切であると感じる機会は少なかった、と言える。手紙「私の誕生」を読む時は、のり付けされている封筒を丁寧にはがし、はずかしそうに読んだり、隣の友達に見えないよう隠しながら読んだり、ニコニコしながら読んだり、様々な表情が見られた。みんなの前で読んでくれた手紙は、両親の愛情が込められた内容であった。表現は違っていても、どの手紙も愛情が込められた内容であった。手紙を読んだ感想を発表し合うことで、手紙の内容と友達の思いを学級全体で比べ、知ることができた。生まれる前の苦労話や生まれることがなかったかもしれない話など、自分の誕生時のエピソードを知ることによって「生まれてきて良かった」「自分の命は貴重なもの」と感じ取ることができた。参観している保護者の中には、涙ぐむ姿も見られた。保護者も子どもも、自分の存在は、とても大切であることや生命の大切さを感じることができた。

抽出生徒Aのワークシートの記述(資料③)

2. 手紙「私の誕生」を読んで思ったこと

自分が生まれた時の親の気持ちは、その本人には分からないけれど、この手紙を通して伝わってきた様な気がしました。これからの色々とめいづくをかけたと思うけれど、親の気持ちにこたえてあげられる様に勉強も部活もがんばりたいと思います。でも毎日毎日おこる事はやめてほしいです。

3. 今日の授業の感想

友達の意見の中にあった様に自分は生まれてきてよかったという気持ちが大きくなりました。最近では自分の命をむだにする人が多くなってきているけれど、世の中には生きてくても生きられない人がたくさんいるので親が今まで育ててくれた事を決してむだにしない様に色々とがんばりたいと思いました。

抽出生徒A(資料③)は、友達の手紙を読んだ感想発表から、自分も友達と同じように生まれてきてよかったと思っている。授業後、抽出生徒Aに記述についての質問をしたところ、友達の感想を聞く中で、友達も自分と同じように大切に思われて生まれてきた大切な存在である、と感じたと答えた。これらのことから友達の感想と自分の感想を重ね合わせて考えていると言える。自分の生命は、たくさんの愛情に包まれていることと生命の大切さを感じ取ったことが伝わってくる。友達も自分と同じように生まれてきた大切な存在であると感じ取っていたと言える。

抽出生徒Bのワークシートの記述(資料④)

2. 手紙「私の誕生」を読んで思ったこと

いつも怒ってばかりいるけれど本当はちゃんと自分のことを思っていてくれているなと思いました。少しうれしかったです。だから、生まれてきて良かったと思いました。

3. 今日の授業の感想

今日の授業を通して、命の大切さ、命があることの素晴らしさを知ることができました。こういう授業があってこそ、何か得られるものがあるのかなと思いました。
今日の授業をやって本当に良かったと思います。

抽出生徒Bの記述（資料④）には、「生まれてきて良かった」という記述がある。保護者からの手紙は、生まれてきて良かったと実感させる力があつたと言える。また、生命の大切さや素晴らしさを感じることができたと言える感想が記述されている。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

いじめに関して自己の行動を振り返る学習や人権に対する理解と行動のずれに関する学習を通して、人権に対する考えを多面的に考えることができた。ふだんの生活の中では、自分自身を振り返る機会の少ない生徒が、道德の時間に自分の考えを知り、友達の考えを知ることができた。この授業だけでなく、学年当初から、話し合いが活発にできる雰囲気作り、人権教育を意識した常時指導や授業も不可欠であったと考える。

また、生命尊重の授業では、保護者を巻き込んで生命の大切さについて考えることができた。保護者も生徒も改めて、生まれてきた感動や今の子どもに寄せる思いを感じることができた。それは、理屈ではなく、感動的に感じるができる学習であった。親は生まれてきた感動を忘れ、生徒はその時の親の思いなど知らずに生活を送っている場合が多い。「私の誕生」という手紙を書くことで、親はもう一度、我が子について振り返り、我が子の誕生の感動を思い起こしたことであろう。その思いが込められた手紙を読んだ生徒は、照れくさいながらも、親に対する感謝の気持ちと自分の存在の大切さに気付くことができたと考える。

「私の誕生」という手紙を通して、生命を大切に育てることができた。保護者からの手紙は、子どもたちにとって、宝物になったことであらう。

2 今後の課題

人権教育は、多面的に取り組む必要があると考え、二つの授業実践だけでなく、常時指導や学級活動・道德の授業の工夫もしてきた。しかし、さらにねらいにせまるためには、人権に関する重点8課題に関する学習を学年を通して、計画的に取り組むことができたなら良かったと考える。

本研究では、一つの授業を道德の時間で実施し

たが、ねらいとする価値が、変わってしまう生徒もいた。ねらいとする価値を達成できるように、さらなる手だてを考えていきたい。

<参考文献>

- ・杉田 莊治 著 『統計からみた、わが国の教育』 Web ページより

（担当指導主事 萩原 勝義）

